

序

わが国にバイオバンクはいくつあるのか？ ヒト疾患にかかわるデータベースはいくつあるのか？ 総計で、一体何人の方々が協力されているのか？

そう問われて、即座に精確な答えを返せる人はいないだろう。大小さまざまな、また、個性豊かなバイオバンクやデータベースが多く構築され、たくさんの方々のご協力を得ている。同じ問いを10年前にされたなら、わが国のそれは数えるほどだっただろう。ここ10年でのバイオバンク、ヒトデータベースの発展はきわめて大きなものである。

一方で、実際にバイオバンク、データベースを使いこなした経験のある研究者が日本にどれだけいるかという点、じつはそれほど多くはないかもしれない。「貯めるだけでなく、使われるバイオバンクへ」はここ数年のバイオバンク界での標語である。そしてその言葉に答えて、各バイオバンクやデータベースはそれぞれで、また協力して努力を続け、より使いやすいものに変貌を遂げつつある。

日本の主要なバイオバンクを結んだネットワークの、横断的な検索システムがスタートし、申請から審査、利活用までのフローが明らかにされてきた。また、それぞれの検体の取得・保管の条件の標準化などが話し合われ、利活用の条件が明示され、さらにそうした付帯的な情報もまた検索などの対象となりつつある。そして何より、収集された検体やデータの蓄積が進み、多様で豊富ななかから選び出す、ということが現実となってきた。わが国のバイオバンク・ヒトデータベースが成長し、今まさに研究のために使われる、その機が熟したとも言える。

本特集号は、そんなわが国の現状について、それぞれのバイオバンクやデータベースを代表する方々、先行して利活用されて研究成果をあげた方々、利活用にまつわる現場の課題に精通する方々に幅広く執筆を依頼しご快諾を得てできあがったものである。本書を片手に、日本中の叡知と、検体・データを提供された方々の志とが結集されたバイオバンク/データベースを縦横に利活用いただければ、企画した者として幸いである。

2021年3月

長神風二，萩島創一